

テクネ・マクラ「芸術は永し」

TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 6 号



私立女子美術学校西洋画科授業風景 大正3年（1914）頃

自校史教育について

原 聖

本学では、平成22（2011）年度より、芸術学部、短期大学の新生を対象に、「基礎学習ゼミ」という大学生としての「基礎的学力」を身につけるための授業を設けている。必修の授業であり、最初の3回を自校史教育にあてている。これは自分の通う大学の歴史を知ることが「基礎的学力」の一部をなす、という考え方によるのであり、このところ、日本全国、各地の大学でさかんに行われていることでもある【注1】。もちろん、こう指摘する以前に、女子美生なら誰でも知っている、教職員や同窓生が知っている片岡球子や三岸節子を、今の新生のほとんどが知らない、という現実がある。ましてや、女子美には110余年の歴史がある。これを知ることが女子美生としての誇りにつながる、という教育方針が前提となっているのである。

自校史教育では、開講時に刊行された『女子美術教育と日本の近代—女子美110年の人物史』（女子美術大学歴史資料室編、2010年）を教科書として用いている。第1回は、横井玉



短期大学部1年生基礎学習ゼミ自校史授業風景（杉並キャンパス）

子（創立者）、佐藤志津（初代校主）を中心として、女子美創立時の状況について。第2回は、女子美創立時から存在する学科、つまり洋画・日本画や刺繍などの学科の歴史。第3回は第2次大戦後、女子美が大学として新たなスタートを切ってから誕生した学科、すなわち工芸科やデザイン科の歴史、さらには代表的卒業生などについて学習するのである。そのうえで、毎回感想文を書いてもらい、基礎的学力である文章表現力も養う、という形にしている。教科書が厚すぎて重いと文句を言う学生もいるが、自校史の内容はおおむね学生には好評である。自校の歴史の重みを理解することは、自意識の向上にもつながるわけである。

本年、杉並キャンパスの歴史資料展示室では、企画展「佐藤志津と私立女子美術学校再興」を開催したが、杉並の授業ではこの企画展を利用した。授業中に展示室におもむき、直接その史料に触れるのである。展示室はそれほど広くはないので、交替で見学し、その説明も10数分だけになったが、それでも直接見ることの意義はたいへん大きい。相模原キャンパスでは本年はこうした企画ができなかったが、杉並での成功をふまえ、今後ともこうした自校史教育の充実化をはかっていくことにしたい。

【注1】「学んでほしい母校のこと」『朝日新聞』2012年10月12日教育面

（女子美術大学歴史資料室室長
／芸術学部教授）

ニュース

平成25年度収蔵資料展

収蔵資料にみる女子美の歩み 開催

高橋 直子

女子美術大学歴史資料室では、現在、「平成25年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み～私立女子美術学校開校時に設置された学科を中心に～」を開催しています（2014年3月16日まで）。

本展では、学校史のパネルとともに、創立者の横井玉子・藤田文蔵、初代校主の佐藤志津を紹介するコーナーを設置し、3人の生涯を紹介するパネルや作品・資料を展示しています。また、収蔵資料の中から本学が開校した明治34年（1901）に設置された8専攻のうち6専攻の作品・資料を展示しています。8専攻とは、日本画科・西洋画科・彫塑科・蒔絵科・編物科・造花科・刺繍科・裁縫科です。8専攻のうち日本画科・西洋画科・刺繍科・裁縫科は現在まで続く専攻です。日本画科・西洋画科は現在、芸術学部美術学科日本画・洋画専攻が専攻名を引き継いでおり、短期大学造形学科美術コースでも教えられています。刺繍科は第二次大戦下において一度、廃止されましたが、その後復活し短期大学・和裁に刺繍教室が設置されました。現在は芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻に位置付けられています。裁縫科は、「服飾科」「ファッション造形」等への名称変更を経て、現在は芸術学部アー

ト・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域と改称されています。また、8専攻のうち彫塑科・蒔絵科・編物科・造花科の4専攻は、昭和24年（1949）の新制大学・女子美術大学が開始されるまでに廃止に

なりました。彫塑科は明治37年の卒業生2名のみ、蒔絵科は入学者不明で、本学に作品や資料は残っていません。両科とも大正6年（1917）に廃止されました【注1】。編物科は昭和5年（1930）に、造花科は昭和19年（1944）に廃止となりました。本展では、大正4年（1915）アメリカ・サンフランシスコ万博に出品した編物科教員・学生作品《テーブル掛》、造花科卒業生作品《薬玉 七寸玉》や型紙・金型など、歴史を閉じた学科の作品・資料も展示しています【注2】。

本学開校時の学科編成の特長は、日本画・西洋画・彫塑・蒔絵など東京美術学校（現東京藝術大学）などの美術学校に設置された「美術」の範囲に入る専攻と、刺繍・裁縫・編物・造花などの実用的な技術を学ぶ専攻とを合わせ持ったことでした。本学は、建学の精神である「芸術による女性の自立」



展示風景

「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を掲げ、同年に創立した津田梅子の女子英学塾（現津田塾大学）や吉岡彌生の東京女医学校（現東京女子医科大学）と同様に職業専門教育を目指す女子高等教育機関として、これまで男性が担ってきた各専門分野における女性の躍進に多いに貢献したといえるでしょう。現在展示中の各専攻の多種多様な作品・資料からそれぞれの専門性の高い教育をご覧ください。

【注1】 戦後の彫刻教育の展開は以下の通り。昭和42年（1967）短期大学造形科に彫塑教室設置。平成13年（2001）芸術学部立体アート学科設置。

【注2】 会期中、展示替えする場合があります。

（歴史資料室学芸員）

取材レポート

杉井あつみ先生講演

～裁縫・服飾・ファッション領域卒業生の集いにて～
歴史資料室



小倉文字教授のご挨拶の様子

平成25年(2013)5月18日、杉並キャンパスにて裁縫・服飾・ファッション領域の同窓会が行われました。その会名は「裁縫科高等師範科・師範科裁縫部・本科裁縫部・被服科・服飾学科・服飾科・服飾美術科・洋裁教室・衣服美術教室・衣服デザイン・服飾デザイン・アパレルデザイン・ファッション造形学科・ファッションテキスタイル表現領域(現)の!卒業生の集い」という、まさに度重なる名称変更が表されたものになりました。現在、杉並キャンパスに校舎を構えるファッションテキスタイル表現領域の歴史を遡れば、明治34年(1901)本学が開校時に設置された裁縫科に行き着きます。同領域は110余年の歴史を持つ伝統的な専攻の一つです。同会では本学にて長年教育に携わってきた杉井あつみ名誉教授のご講演が開催されました。本記事にて講演の要約を報告します。

開会にあたり、小倉文字教授より次のようなご挨拶がありました。「本日は18歳の学生から90代の方まで同じ会場に集まっています。平成13年(2001)、短期大学部服飾科(杉並キャンパス)が芸術学部ファッション造形学科(相模原キャンパス)に改組した際、本日より同じような大規模な同窓会を開きました。そして、

平成22年(2010)、芸術学部再編の際、芸術学部アート・デザイン表現学科の中にファッションテキスタイル表現領域が設置され、本年、杉並キャンパスに同領域の1～4年生が揃う完成年度を迎えました。同時に、大学院も杉並キャンパスに移転しましたので、本日卒業生の皆さんにご報告する場を設けました。」歴史と卒業生を大切に作る気持ちが表れたご挨拶でした。

杉井先生は在学、在職中のことをエピソードを交えながら講演されました。以下に講演の要約を掲載します。

女子美術専門学校本科裁縫部へ入学したのは、昭和18年(1943)4月。担当の先生方は熱心に研究を重ね、大正13年(1924)『現代和裁裁縫書』を出版、改訂を加えながら昭和17年(1942)までに全5巻をまとめられました。この書は常に高い評価を受け、外部からも求められていたということです。それが私達の教科書で、和裁教育は戦前には女子美の中に確立されていたのです。昭和19年(1944)7月から学徒動員令が発せられ丸1年間工場勤務を余儀なくされました。人生にはこういう不条理を忍ばねばならない時もあるのです。向学心を満足させられない当時の動員中の工場に、新しく着任された学

監の森岡喜三郎先生が各地で働いている学生のもとを訪れ、励まし労いの言葉をかけられました。一同は学校との繋がりを温かく感じました。1年の動員が解除になり、学校に戻って授業を続けていた時に終戦。昭和20年(1945)8月15日の玉音を学校のラジオで聴きました。9月に卒業、翌月補習科の授業開始の知らせが届き、3月までの半年間学校でみっちり学べる生活がやっと戻り、皆は全力を注いで励みました。この時から洋裁が主となり新宿の服装学院から講師が招かれてその方式で活発な授業が行われスーツを縫い上げるレベルにまで達しました。学校に残った私は昭和22年(1947)8月、友人の親切な知らせで教員対象の洋裁講習会に出、初めて高田力之先生を知りました。先生は「目まぐるしく変化する流行を追うことは教育上なすべきではない。何時の時代にも変わらない基礎を教えることこそ一番大事なことです。」そして「先ずあらゆる装飾を取り除いたあとに残るもの、衣服として最小限の必要を満たすだけのものを追求すること。これが基礎の研究として不可欠なものと考えます。」と話されました。私はこの時高田先生についていくことを決めました。夏休みが終わってすぐ森岡先生に辞表を提出し、高田先生の許で研

究を重ねました。昭和23年(1948)秋、森岡先生と高田先生のご対面の機会を作りました。森岡先生はかねてから女子美には立派な歴史と建学の精神が受け継がれていること、そして、本学独自の教育の場を作らねばと熱意を持って語られ、新制大学の服飾学科の専任教授の職を要請し、受諾していただくこととなりました。その後、服飾学科は昭和26年(1951)短期大学部となり学校経営を支えるまでに発展しました。さらに、平成13年(2001)には4年制の芸術学部ファッション造形学科、平成22年(2010)にはファッションテキスタイル表現領域としてスタートし、今につながっています。

創立以来、女子美で展開されてきた衣服教育は、社会の要請やさまざまな経緯から名称を変更してきましたが、「服の美を追求する」学科として各人が情熱を持って支えてきた功績に畏敬の念を覚えます。

講演の後、杉並キャンパス新1号館110周年ホールでの懇親会に臨み、理事長 大村智先生の教育の場に惜しみない情熱を注ぐ姿勢、杉並和田の地に根付いた女子美を見ることができたことに心から感謝申し上げます。

裁縫・服飾・ファッション領域の歴史の中で、最も困難を極めた時期に尽力された杉井先生のお話真剣に耳を傾けていた場の皆さんの様子が印象的でした。



杉井あつみ先生ご講演の様子

杉井 あつみ

昭和21年(1946)女子美術専門学校本科裁縫科卒業。同校助手、講師、助教授を経て昭和46年(1971)教授就任。平成3年(1991)定年退職、名誉教授就任。著作『衣服造形』デザインと構成の応用(衣生活研究会、1995)等。

関連年表

明治33(1900)年

私立女子美術学校設立の認可を受ける。

明治34(1901)年

東京府本郷区弓町(現東京都文京区)の校舎において開校。

日本画科・西洋画科・彫塑科・蒔絵科・編物科・造花科・刺繍科・裁縫科の8専攻を設置。

各科に本科普通科、本科高等科、撰科普通科、撰科高等科を設置。

明治42(1909)年

全科に高等師範科を設置。

大正6(1917)年

この年より裁縫科では従来の尺貫法を廃してメートル法にて教える。

大正7(1918)年

裁縫科普通師範科卒業生に裁縫および手芸科中等教員無試験検定資格付与。

昭和24(1949)年

学制改革より女子美術大学発足。芸術学部美術学科に洋画・日本画・図案を、服飾学科に洋裁・和裁・手芸を設置。

昭和25(1950)年

芸術学部服飾学科を廃止。短期大学部を併設し、服飾科を設置。

昭和35(1960)年

短期大学部服飾科を服飾美術科に、図工科を造形美術科に名称変更。

昭和38(1963)年

短期大学服飾美術科を服飾科に、造形美術科を造形科に名称を変更。服飾科に洋裁・和裁・刺繍の3教室、造形科に図案・生活美術・衣服美術・絵画の4教室を設置。

昭和43(1968)年

短期大学造形科の再編成によりグラフィックデザイン・ディスプレイデザイン・生活デザイン・テキスタイルデザイン・衣服デザイン・絵画・彫塑の7教室となる。

平成5(1993)年

短期大学服飾科を改組し、短期大学服飾科洋裁教室を服飾デザインコースに、刺繍教室を刺繍コースに名称変更。

平成7(1995)年

短期大学服飾科に服飾文化コースを開設。

平成13(2001)年

女子美術大学芸術学部ファッション造形学科・立体アート学科・メディアアート学科を設置。

平成14(2002)年

女子美術大学短期大学部服飾科を廃止。

平成22(2010)年

芸術学部美術学科(4専攻)、デザイン・工芸学科(4専攻)、アート・デザイン表現学科(4領域)を設置。ファッションテキスタイル表現領域は、アート・デザイン表現学科に位置付けられた。

女子美人物伝

磯野 吉雄 (1875-1948) 初代西洋画科教員

高橋 直子

磯野吉雄は、私立女子美術学校開校時から大正5年（1916）まで西洋画科の教員を務めた教育者・洋画家です。

磯野吉雄は明治8年（1875）東京市下谷区御徒町に生まれました。夏井潔、能勢鶴次郎、五姓田義松らに絵画を学んだ後、明治29年（1896）、東京美術学校（現東京藝術大学）撰科西洋画科に入学。当時、同校西洋画科教授であった黒田清輝に4年間学びました。在学中の明治31年（1898）に第3回白馬会展覧会に《田圃の斜陽》など20点を出品。その後も第7回まで毎回出品し、創立十周年記念展にも出品しました。

明治33年（1900）7月、東京美術学校を卒業。翌年4月、私立女子美術学校西洋画科教員に就任しました。磯野は東京美術学校における黒田の教育方針を踏襲し、石膏像や人体（ヌード）デッサンなど実物写生を重視した指導を行ないました【本誌表紙写真参照】。磯野は西洋画科教員としてだけでなく、学校運営にも関わりました。明治41年（1908）、火災により開校時の校舎である本郷弓町校舎が焼失してしまいましたが、磯野は



【写真1】 サンフランシスコ万国博覧会に向け制作する造花科学生たち
後方に立つ男性が磯野吉雄

当時の校主・校長であった佐藤志津を補佐し、仮校舎の確保と菊坂新校舎の建設に尽力しました。また、大正4年（1915）、本学は文部省の命を受け、アメリカ・サンフランシスコ万国博覧会に参加し、金牌受賞という名誉を受けますが、他学科の写真に磯野が登場していることから、準備の際、学校全体の指揮をとっていたことが推測されます【写真1】。しかし、大正5年（1916）、磯野と教務主任・谷紀三郎との対立が発端となり、学内教員全体に混乱が起り、十数名の教員が同時に退職するという事件が起きます。佐藤志津は磯野・谷の両者を辞めさせる決断を下し、磯野は本学を退職することとなりました。

その後、磯野は「磯野学申^{がくしん}」として書道界で活躍するように

なります。書家・田口米舂と姻戚関係にあったことから書に造詣が深かった磯野は、昭和9年（1934）三楽書道会創立とともに副会長に就任。昭和18年（1943）には大日本書道報国会結成の際、事務局次長となりましたが、意見の対立から3ヶ月で辞職。昭和20年（1945）の日本書道美術院結成の際には副会長に就任し、日本書壇再建に尽力しました。

磯野吉雄は西洋画科設置以後の15年間という重要な時期に初代教員として本学の洋画教育の基礎を固めた功労者といえるでしょう。

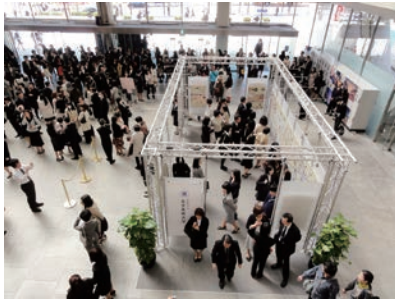
参考文献
美術新聞社編集部編『日本近・現代書道<名家・名作・重要作品>総覧編集ハンドブックⅢ』菅原書房、2012

（歴史資料室学芸員）

歴史資料室日誌 2013年4月～9月

4月

○平成25年度合同入学式開催。
会場である中野サンプラザロビーに学校史パネルを展示。



展示会場

○新1年生が受講する基礎学習ゼミ自校史教育に教材作成等協力（～5月）。杉並キャンパス受講者は歴史資料展示室を見学（本誌2ページ参照）。

5月

○裁縫・服飾・ファッション領域「卒業生の集い」を取材（本誌4～5ページ参照）。

7月

○女子美術大学歴史資料展示室にて2013年1月から開催されていた企画展「佐藤志津と私立女子美術学校再興」が終了。



展示風景

8月

○本学初期の朝鮮留学生で洋画家・羅蕙錫（1896-1948）を研究する羅蕙錫学会調査団一行が韓国より来訪。



横井玉子像を見学する一行（杉並キャンパス）

9月

○女子美ギャラリーニケ（杉並キャンパス）にて開催された企画展「井江春代 はり絵の世界～大地の女神・パチャママと動物たち～」に歴史資料室寄託井江春代作品を貸出。



展示会場

○女子美術大学歴史資料展示室にて「平成25年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み～私立女子美術学校開校時に設置された学科を中心に～」を開催。会期は2014年3月まで（本誌3ページ参照）。



展示風景

○杉並キャンパス6号館2階廊下展示ケース内に本学の歴史を彩ってきた「記念品」をテーマとした展示を行なった。



展示風景

寄贈報告 2013年4月～2013年9月

作品・資料をご寄贈いただいた方の御名前を記し、感謝の意を表します。

- 木下道子氏 平成19年度杉並区青少年表彰トロフィー等4件
- 谷口秀子氏 矢嶋楯子関連書籍1冊
- 下津君子氏 教科書、同窓会報等12件
- 岩田嘉之氏 加藤成之写真1件
- 小坂橋きん氏 『小坂橋きん 日本画集』1冊
- 中村節雄氏 『女子美術学校第26回 佐藤高等女学校第5回 卒業生記念帖』(大正11年) 1件
- 田邊麗子氏 授業用スライド、ビデオ43件
- 東出美知子氏 井江春代絵葉書10件
- 永田みどり氏 女子美祭絵葉書等15件
- 花島光男氏 『女子美術学校第26回 佐藤高等女学校第5回 卒業生記念帖』(大正11年)、写真等16件
- 大崎綾子氏 新島八重関連書籍1冊

平成25年度 歴史資料整備委員会委員紹介 (任期 平成25年6月～平成27年5月)

- 委員長 原 聖 (歴史資料室室長、芸術学部教授)
委員 岡田宣世 (芸術学部教授)
鹿島 繭 (短期大学部教授)
工藤恒子 (外部嘱託委員)
見城美子 (外部嘱託委員)
谷口秀子 (外部嘱託委員)
遠藤九郎 (外部嘱託委員)
内藤幸江 (事務職員)

情報提供・ご寄贈のお願い

女子美術大学歴史資料室では本学の歴史・教育内容を伝える作品・資料の収集を行っており、特に創立期から戦前期について重点的に収集・調査しています。教材・教員写真などをお持ちでご寄贈いただける方、または情報をご提供いただける方は、女子美術大学歴史資料室までご連絡くださいますようお願い申し上げます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

表紙写真

私立女子美術学校西洋画科授業風景
大正4年(1915)頃

ヌードモデルを囲みデッサンをする大正4年頃の本学西洋画科の様子。人体をモデルにした洋画学習方法を本格的に始めたのは明治9年に設置された工部美術学校以降のことであるが、その場合、着衣の人物や半裸体であった。その後、東京美術学校(現東京藝術大学)西洋画科(明治29年設置)において本格的なヌードデッサンが行なわれた。本学西洋画科では東京美術学校に学んだ初代教員・磯野吉雄のもと、同校の影響が色濃い教育が行なわれていたため、本学西洋画科でも初期よりヌードデッサンがカリキュラムに取り入れられていた。

TEXNH MAKPA 第6号

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター
発行日：2013年12月16日
編集・発行：女子美術大学歴史資料室
デザイン担当：竹田奈那子
制作・印刷：株式会社 日相印刷

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階
TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683
E-mail：heritage@venus.joshibi.jp
URL：http://www.joshibi.net/history/

 女子美術大学